



日本聖公会 大阪教区 川口基督教会

# イクソス150周年特別号③

イクソス第59号(教会報第653号)



2021年11月14日発行

牧師：司祭 ステパノ 柳 時京

〒550-0021 大阪市西区川口 1-3-8 TEL 06-6581-5061

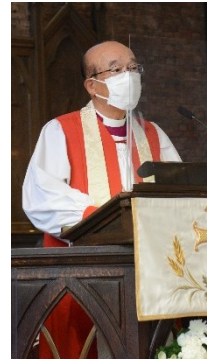
<http://www.nskk.org/osaka/church/kawaguchi/>

✉ [kawaguchi@guitar.ocn.ne.jp](mailto:kawaguchi@guitar.ocn.ne.jp)

## 記念感謝礼拝 説教

前大阪教区主教

サムエル 大西 修



2年に及ぶコロナ感染症の蔓延のため、昨年11月3日に予定されていた川口基督教会宣教150周年、聖堂建築100周年記念の感謝礼拝は、1年の延期を余儀なくされましたが、今日こうしてここに行えますことを感謝いたします。コロナのために、尊い命を奪われた多くの方々、今この時も苦しみのうちにある患者さんとそのご家族の方々を覚えます。また寝食を忘れ、患者さん方の治療に関わっておられる医療福祉従事者の皆様のご苦労に頭が下がる思いがいたします。

さて、川口基督教会の150年にわたる宣教の歴史は、1869年長崎から大阪に移られた40歳のウイリアムズ主教が、翌1870年、

川口居留地に近い付属内外人雑居地の自宅(与力町)の一室で礼拝を始めた時からスタートいたしました。この出来事は日本聖公会の宣教活動の幕開けと言っても過言ではありません。ウイリアムズ主教の事跡については多くの書物に記されていますので、ここで詳細について申し上げることは差し控えますが、主教は今日のわたしたちの宣教に取り組む姿勢に対して多くの示唆を与えてくださっています。わたくしたちには想像もできないほど困難な状況下、すなわちキリシタン禁制の高札が撤去される1873年より3年前に、ただお一人で大阪における宣教を開始されています。そして徐々に他の宣教師たちとともに、その活動を広げていきました。福音を宣べ伝えることは、まず祈りによって始められねばなりません。日ごとの祈りが真心をこめてなされることから宣教は始まります。その意味でウイリアムズ主教は祈りの人でありました。教育事業、医療事業、社会福祉事業がそこから生まれました。川口居留地はまさに

これらの事業が生まれる揺りかごの地であったのです。ウイリアムズ主教の感化のもとに立教学院、平安女学院、プール学院、桃山学院、聖公会神学院、聖バルナバ病院、博愛社などが誕生いたしました。川口基督教会はこのような状況下に生まれ、宣教する教会として成長してきました。

明治政府の密偵(スパイ)伊沢道一は「浪華日記」でウイリアムズ主教の「昔カラ此道ヲ弘メテ死ヌル人ハ甚多ヒ、道ノ為ニ死ヌ人ガ多クレバ道ガ早く開ケマス、私共コノ日本ニ渡リテ居マシテハ本國ニ還テ死ヌルトハ思マセヌ(中略)殺サレマセウトモ更ニ恐レヌ」という発言を聞いて、「其念金石ノ如シ余ヒソカニ寒心シテ別ル」と書いて畏怖しています。この信仰を受け継いできたのが川口基督教会です。150年間の歴史を振り返ってみても、何の問題もなく、平穩無事な時代はありませんでした。どのような時代であつてもその時の教区主教、教会の司祭、教役者、教会委員、在籍信徒お一人お一人に問題は山積していたと思います。

現在も同じです。遭遇した問題に  
まっすぐ向き合うか、あるいは見  
て見ぬふりをしてやり過ごしてし  
まうかによって、結果は大きく違っ  
てきます。コロナ禍にある今だけ  
からこそ、静かにこれまでの教会の  
歴史を振り返り、同時に自分自身  
の信仰の歩みを見つめ直す良き機  
会が与えられているのではないか  
と思います。

初代牧師名出保太郎司祭の9年  
目(1906年)、受聖餐者総会とい  
ち早く自給決議がなされ、192  
0年には新礼拝堂が竣工し聖別さ  
れています。熱い思いをもった信  
徒の一致した祈りが結実したもの  
にほかなりません。側垣基雄司祭  
時代には室戸台風(1934年で倒  
壊したプール女学院の教室として  
会館を提供したり、大阪大空襲(1  
945年6月)で罹災した近隣の中  
国人約300人の臨時収容所に教会  
を開放したりもしました。厳しい  
状況下にあっても地域社会と深い  
関わりを持っていた教会としての  
奉仕の姿を見ることができません。  
礼拝堂を焼失から守るため、必死  
に消火作業を行った牧師、その一

方で牧師館が全焼するという戦争  
の厳しい現実もありました。

心痛む出来事は、宗教法人法施  
行(1940年)により新しい日本基  
督教団へ大阪教区は加入を決議、  
川口基督教会も臨時受聖餐者総会  
で日本基督教団への加入を決議し  
たこと、日本聖公会の法的組織が  
解消し(1942年2月3日)、川口基  
督教会は日本基督教団川口教会と  
なったことです。(1943年11月24  
日)、戦後、宗教法人法が廃止され、  
大阪教区の全教会は日本聖公会へ  
復帰(1947年7月14日)しました  
が、この教団合同に対して苦汁の  
決断を迫られた当時の日本聖公会  
の教区・教会、そして教役者、信  
徒一人一人の思いは察して余りあ  
るものがあります。

いわゆる合同問題は、その当時  
を生きた信仰者の信仰のあり方を  
映し出しているものです。真摯な  
祈りのうちに一つの決断がなされ  
ましたが、それは分裂という大き  
な痛みと傷を伴うものでした。痛  
みと傷は決して癒えず残りますが、  
戦争によって人間が犯した罪がも  
たらしたものととして、全能の神の

赦しを固く信じて謙虚にそれを受  
け止めていくとき、必ず新たな道  
が示されると信じています。

戦後の活動の一つとして、19  
46年西宮市に児童養護施設「三  
光塾」が側垣基雄司祭によって開  
設されたことは、教会の社会への  
大切な奉仕活動として位置付けら  
れます。1950年、久保淵豊彦  
司祭の時、大阪教区主教座に指定  
され、教区の中心的な存在として、  
大切な役割を担うようになり、そ  
れとともに教会内の諸活動もさら  
に活発になされるようになりました。  
礼拝堂内の整備がなされ礼拝  
が豊かになったこと、地区礼拝の  
充実、信徒の聖書の学び、伝道集  
会など多くのプログラムが計画実  
行されてきました。

記憶に新しい出来事は、19  
95年1月17日早朝発生した阪  
神・淡路大震災です。6千人を超  
す死者と数多くの建造物の倒壊と  
火災の発生、また生活のパイプラ  
インが寸断されました。教会も大  
きな被害を受け、礼拝堂、会館が  
使用不能となり、塔も傾斜し危険  
回避のため上部を一部解体しまし

た。この事態をうけて臨時受聖餐  
者総会が7月に開催され、「礼拝堂  
は補強補修、内外装は復元、会館  
は解体新築(費用4億5千万円)」を  
決議しました。賛否両論、侃々諤々  
(かんかんがくがく)、祈りのうちに  
なされた決議は素晴らしいもの  
だったと思います。なぜ、そんな  
に大金を投じてまで復興工事をす  
るのかといった批判が内外にあり  
ました。しかし、神は必要なら必  
ず願いを叶えてくださるとの一致  
した祈りが聞かれました。

その9年後の2004年、わた  
しは新潟県の長岡聖ルカ教会と三  
条聖母マリア教会の牧師の時、三  
条の大水害と長岡の中越地震がた  
て続けに起こりました。その時も、  
祈りより決断して救援活動に取り  
組みました。各方面からの暖かい  
多くの支援があったことも忘れる  
ことができません。2011年の  
東日本大震災の時には、京都・大  
阪・神戸の3教区が協働して救  
援・支援活動にあたりました。大  
阪教区は5千万円の救援募金を  
集め、阪神・淡路大震災での支援  
に感謝する気持ちの一端を東北教

区に表しました。

ところで、これまでにいったい何人の人が歴史あるこの教会の門をくぐって礼拝堂に入り、祈りをささげ、御言葉に耳を傾け、聖歌を歌って主を賛美し、洗礼堅信式を受け聖餐に与り、主の御体と御血をいただき、生かされて社会へ出で行ったことでしょうか。

二千年にわたるキリスト教の歴史の中で川口は150年、その中の何年間をわたしたちはこの教会、あるいは皆さんの所属している教会と共に歩んで来たでしょうか。

長い人で70〜80年、短い人で1〜2年かもしれない。「信者になることは容易であるが、信者であるということは難しいことです。」と山田元(\*)は言っています。

信者であるということは、日々主に従うことを祈りのうちに決断することです。生きていく中で苦しく、辛く厳しく、できれば避けて通りたいという思いに駆られたとき、それを乗り越えることは並大抵なことではありません。しかし聖書を紐解くと、実に多くの先人たちがそのような経験をし、そ

れを乗り越えています。族長アブラハムは主の言葉に従って、地縁血縁を離れ、主が示された見知らぬ土地へと旅立ちます。モーセは神から出エジプトのリーダーを命ぜられ重い腰を上げました。「わたしは必ずあなたと共にいる」と約束された言葉を信じて(出3:12)。(中略)ペテロは「あなたは今夜、

鶏が鳴く前に、三度わたしのことを知らないというだろう。」と言われた言葉に「たとえ一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません。」と断言しますが、イエスが捕らえられ連行された大祭司の屋敷の中庭で、いとも簡単に「そんな人は知らない」と3度も言うてしまします。

このようにいつも心の弱さを露呈し、過ちの多い、そのうえ傲慢なわたしたち一人一人を愛を持って赦し、受け入れてくださるお方によって、わたしたちは今を生かされ、生きています。

大阪教区は初代名出主教に始まり、現在8代目の磯主教へと主教職が継承されてきました。また教

会の司祭は初代の名出司祭(後の主教)から、現在の柳時京司祭へと継承されています。

教区主教就任も司祭の新任地への転任も神による派遣として、これを受け入れます。牧師の人事異動は大変です。なぜならそこに人間的な思惑が絡むからです。聖職は自分の思いで牧師になるものではありません。主によって遣わされるという信仰に立つとき、潔く任地の教会に行くことができます。

わたくしが主教であったときの人事に対しては、皆さんが信仰を持つて厳粛な思いでこれを決断し、受け入れてくださったことを思い出し、主に感謝しています。

わたくしは牧師としての人事異動を何度も経験しました。召された任地へ行くことには正直、若干の不安はありましたが、それ以上に主の御用に対する大きな夢と希望に胸ふくらませていました。大変だろうが主が「わたしはいつもあなたがたと共にいる」という御言葉を信じて進んでいくとき、必ず道は開かれることを知りました。恥ずかしい話ですが、わたしは

主教に選ばれた時、今だかつてなかったほどに真剣な思いをもって祈りました。こんなに真剣に祈ったことはこれまでに一度もありませんでしたし、生涯にたった一度だけだったかもしれません。この先、残された日々の中でこれを超える祈りがあれば別ですが・・・わたしに主教としての働きが務まるだろうか、何の能力もないわたしが未知の大阪教区で働くことが出来るのだろうか、やはり無理ではないだろうか等々、自問自答を繰り返す日々を過ごしました。多くの難関にぶつかったとき、イエスはただ一人山に登り、血の汗を流して祈られたことを思い起こしながら・・・

自分が何をするのか、わたしに何が出来るのだろうかといった思いや問いは、よく考えてみると真面目な思いや問いであることは確かですが、それは人間的思考が先行し、主イエスを信じ、主イエスに従って行こうという謙虚な姿勢とは正反対の生き方であることにいつも気づかされます。

ある人がイエスのもとに来て、

「水遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか」と尋ねたマルコによる福音書10章17節以下の物語を思い起こします。わたしたちは広い意味で金持ちで、富める者です。あれもあるし、これもあるから、自分でやればできると考えます。お金だけが富ではありません。わたしたちが持っているよいものも悪いものも、いらない、ほしくないと思うものも実は神から頂いた大切な富なのです。自分一人では何もできない無力な存在であることに気づいていない、わたしの命は主の御手のうちにあることを忘れていることが多いのです。祈りによって、何事も主にお任せすることが最優先課題であることをあらためて教えられました。大阪教区はたくさんの聖職が、それぞれ主から与えられた多様な賜物を生かし、豊かにそれを用いて宣教の業に勤しんでおられます。その姿に励まされ、励みて働かせていただきました。主を信じ、人々を信じて協働していくところに主によって、道はおのずから開かれ、整えられることを確信しています。

川口の信徒の皆様が先達から受け継いで来られた数々の多様な賜物が、お一人お一人の上に豊かにあることを信じ、これからもますます信者であってほしいと願っています。川口の礼拝や諸集会などを通して主にある交わりは楽しく、恵まれたものであったことを深く感謝しています。

主イエスは十字架の死を目前にして、決別の説教をされ「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。」(ヨハネ16:33)と弟子たちを励まされました。そして最後に長い「とりなしの祈り」をされました。「あなたがわたしを世にお遣わしになったように、わたしも彼らを世に遣わしました。父よ、あなたがわたしの内にいるように、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしの内にいるようにしてください。」(ヨハネ17:20) このように祈られた主イエスは、尊い命を十字架の上に投げ出すことによって神の愛を示され、すべての人の罪を赦し、すべての

人の一致を成し遂げられたのです。十字架の死は終わりではなく、復活によって勝利をもたらすものとなったのです。わたしたちもキリストと共に、その復活の勝利にあずかる者とされて生かされ、世に遣わされているのです。

コロナ禍に存在する教会は一つのこと気づかされています。教会の業、宣教の業は合理的かつ能率的になされるものではなく、不合理的、非能率的かつ地道に、丁寧になされるものであるということです。水遠の命、魂の問題に関わること、常に弱いもの、小さい者、見過ごしてしまいがちな事柄に目を向けるため、当然リスクを伴います。主に従って生きること、この世の価値基準からすれば、無価値に等しく、損な生き方にほかなりません。

わたくしたちはあまりにも人間的な思いにとらわれすぎて事に対処してはいないだろうか、困難なこと、関わりたくないこと、共に重荷を負うことを避けようとしてはいないでしょうか、大丈夫だと確信が持てたら行動に移すとすれ

ば、いつのことでしょうか。決断は問題が一つの解決の方向を示しているからするのではなく、まだ見ぬ厳しい将来が待ち受けているかもしれないが、主を信じて真剣に祈り、主に従って行くことを決めたときなされるものです。そこには希望に満ちた新たな道が見えてくるのではないのでしょうか。仮にまた壁にぶつかったとしても、主は次に行くべき道を示してください。大阪教区と京都教区の合併問題も「いつですか」という問いに対して、「今でしょー」という祈りによる決断をしていけたら素晴らしいなあと思います。

川口基督教会がこれからも主の導きを信じて、さらなる沖へ、深みへ宣教の舟を漕ぎ進めていかれるようお祈りいたします。

最後に聖歌470番を記します。

「人の目にはすべなしと見ゆる  
ときも主はかならず 良き道をば  
備えたもう われは信ず 主はかならず  
ととのえて与えたもう」

(※やまだ はじめ(1892)1948)

京都聖マリア教会で受洗、京大卒、兵庫  
県の土木技師、後に内務省の技師となり。

目白聖公会の建築資金の大半をささげた。